2021
利根山光人
生誕 100 周年

利根山光人

Toneyama Kojin

第105号　令和２年4月20日

記念美術館通信
Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2
TEL/FAX 0197-65-1808

令和２年度前期企画展

令和２年４月１日㈬-５月28日㈭

利根山光人 -若き日-

― 当館初公開作品を含む所蔵作品展 ―

春の海

情熱的な作品を次々に発表し「太陽の画家」と呼ばれた利根山。没後の 96 年、遺族から寄付されたアトリエを改装し開館された当記念美術館では、寄贈された約 400 点の作品を軸に毎年企画展を開いている。

一昨年は、地元をはじめとする日本の民俗芸能のスケッチを中心とした展示を、昨年は「反骨のバイタリティー」と称し、生命の祝福や人間性の解放を感じさせる版画作品を展示した。

今回の企画展は、当美術館初公開作品を含む利根山の画業初期の作品、29 点を展示する。メキシコ訪問以前の制作の様子も垣間見られるものとなっているが、1950 年代後半の制作にはもうすでにメキシコ美術の影響が大きい。同時期には「佐久間ダムシリーズ」のように社会問題を扱った作品も見られるが、この「若き日」の時代の風景や建物を描いた油彩画には、直接的なテーマ性をぶつける表現とは別に、対象を新鮮な目で見つめて描かれた純粋な感動が伝わる。

梟

とは言え、写実に徹するという姿勢からは一歩抜け出し、萬鉄五郎（1885 － 1927）の初期風景画にも通じるフォービズムの影響も感じられ、さらには夢のような奇妙なイメージを描いたシュールレアリズム風の作品など、この時期の画伯は実に多様性に富んだ実験的試みを行っている。これらは先駆的に日本画壇の閉鎖性を打破しようとした試みでもあり、利根山の野心を感じる。

制作年代が古く画面や額の状態が決して良くない作品もあるが、円熟期とも言える常設展の大作と比較しながら、画伯 30 ～ 40 歳代の若き日の作品の充実ぶりをじっくり味わっていただきたい。

※５月 29 日㈮展示替えのため休館日となります。

― 今年度の企画展の予定 ―

※８月 28 日㈮は展示替えのため休館日となります。

阿部夏希展 【５月 30 日㈯～８月 27 日㈭】

開館 20 周年記念利根山光人記念大賞展
準大賞受賞の現役作家の版画作品展。

千田浩文展 【８月29日㈯～ 11 月 30 日㈪】

高校教育・美術教育に情熱を注ぎ、現在も
制作活動を続ける当館専任研究員の作品展。

「第 23 回光の会美術展」を開催しました。

「光の会」とは当館絵画教室修了生による絵画作品展示会で、２月初旬に 23 回目が開催されました。昨年８月に絵画教室を修了した受講生を含む 30 名の作品 46 点と招待作家３名及び利根山画伯の作品を展示しました。

油彩画をはじめアクリル画や水彩画もあり、小品から 60 号の大作までテーマもさまざまな個性豊かな作品で会場が彩られました。会場の市民交流プラザは改築のため、次回は会場を変更して開催いたします。

～@TONE美～　『太郎さんと光人さん』

当美術館の常設展示室の入り口正面に、鹿踊りの頭（かしら）の横でカッと目をむいて白い歯を見せて笑う、どこか挑発的な表情の利根山光人画伯の写真が展示されている。画伯の写真の中ではもっとも撮られることを意識して表情を作ったともいえる写真である。

地元の民俗芸能と戯れているのが何より楽しいといった無邪気さがその表情によく表れている。

さてこの表情、同世代の誰かさんに似ている・・・と思いませんか。そう、芸術家岡本太郎氏だ。

当時、利根山画伯よりメディアへの露出が多かった太郎氏は「芸術は爆発だ！」というキャッチフレーズや、その晩年のTVのバラエティーなどの活躍振りは大人気だった。時には目をむいて口をへの字に曲げて全身で決めポーズを作ってみせる・・・そんなパフォーマーとしての太郎氏と利根山画伯のこの写真とが重なった。

どちらも一瞬こっちがひるんでしまいそうな、顔の表情が持つ圧力を感じる。

この同世代の二人の画家は気が付くと随分共通点が多い。

以下、親しみを込め「光人さん」と「太郎さん」で書き進める。

光人さんは1921年生まれ、1994年72歳で死去。太郎さんは1911年生まれ、1996年84歳で死去。まさに同時代を生きた芸術家同士だった。

この二人に交流があったかというとまさに、「よく会っていた」と岡本太郎美術館の学芸員が述べている。

光人さんのメキシコ好きは言うまでもないが、太郎さんとメキシコの関わりも深い。現在渋谷駅の連絡通路に設置してあり、太郎さんの最大にして最高傑作といわれる「明日の神話」はもともとメキシコのホテルのオーナーから依頼を受けて作成したものだ。ホテルの倒産により、この壁画は公開されることなく倉庫の中で眠ったままになっていたが、太郎さんの没後発見され、全面的に修復されて今に至る。

どうやら太郎さんも1955年、東京国立博物館でのメキシコ美術展を見て感激し、マヤやアステカの古代文明に魅かれ、何度もメキシコを訪れていたことが縁で壁画制作に至ったらしい。

メキシコ美術館、古代文明、壁画・・・・・これらのキーワードがまさに光人さんと全く共通するのに驚く。

こうして太郎さんと光人さんを並べて述べる理由の一つは、本館の常設展を見て「岡本太郎さんに似ていますね」とおっしゃる観覧者が多いこともある。

やはり色彩の強烈さだろうか・・・。赤・青・黄の純色を躊躇なく置いていく方法と言い、大胆な画面構成や黒い太い線で形を克明に描写していくやり方も共通するので、受ける印象は確かに似ているのかもしれない。しかし、光人さんの場合「鹿踊り」の絵のササラの表現に見られるように、画面を大きく走る線はバシッと直線的なのに対し、一般に知られる太郎さんの絵はうねるような曲線の要素が多く、筆のタッチはなめらかである。

知名度から言うと圧倒的に太郎さんのほうが高いだろうから、こうして日本の近代絵画の代表ともいえる太郎さんを引き合いに出して鑑賞した方が美術館での会話も弾む、ということかもしれない。

年代から言って当然のことながら両氏とも軍隊経験を持つ。

20代前半には光人さんは水戸の部隊に入隊し、太郎さんは中国戦線に出てこの地で収容所に入所している。（次号に続く）　　専任研究員

令和２年度の利根山光人記念美術館専任研究員は次のとおりです。
専任研究員の出勤曜日をお知らせします。

菊地 仁美（日・月）　髙橋 浩生（火・水）　千田 浩文（木）　髙橋 平光（金・土）　よろしくお願いします。

※都合により変更の時がありますので、直接美術館へお問い合わせください。電話番号 0197-65-1808

発行　北上市まちづくり部生涯学習文化課
〒024-0061　岩手県北上市大通り 1-3-1　電話 0197-72-8304　FAX 0197-63-3121